

平成22年 6月28日現在

研究種目：基盤研究（B）  
 研究期間：2006～2009  
 課題番号：18330108  
 研究課題名（和文）「社会調査史の博物館」としてのリージョン拠点データアーカイブの構築  
 研究課題名（英文）The Building of Regional Data Archive as the Historical Museum of Social Research  
 研究代表者  
 大國 充彦（OHKUNI ATSUSHIKO）  
 札幌学院大学・社会情報学部・教授  
 研究者番号：40265046

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、北海道の社会調査資料の整理と再利用可能性の検討である。第1に、開発と計画などの5つのテーマで整理し、戦後北海道の社会調査は、長期の多様なデータを駆使した、実践的な関心に基づく研究であることがわかった。第2に、北大の布施グループによる「夕張調査」関連資料、特に調査票とコーディングシートを2次利用可能な形に整理した。調査資料を調査者が整理する必要性が明らかになり、資料を再利用可能な形にするモデルの一つを提示できた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to organize materials of social surveys in Hokkaido and to examine the possibility of reusing materials. First, organized in five themes, such as development and planning, social surveys in post-war Hokkaido is found to be empirical and practical survey researches. Second, by a group of Fuse in Hokkaido University "Yubari" survey materials, especially questionnaires and coding sheets are arranged in a usable form for the second survey. We reveal the need to organize their research materials on researchers own and present a model to form reusable materials.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
2007年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
2008年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
2009年度	3,000,000	900,000	3,900,000
総計	15,200,000	4,560,000	19,760,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：社会学、社会調査、データアーカイブ

## 1. 研究開始当初の背景

今日の情報技術水準によってオーラル（音声）・画像情報などマルチメディア情報を追加収集・公開できるので、ミュージアムにお

ける「見せ方」について可能性が広がっている。研究分担者のうち新國は情報処理学とりわけデータベース論の専門家なので、こうしたマルチメディア的側面に強い関心を抱いて

いる（札幌学院大学社会情報学部は他にも情報処理学の専門家を多く抱えているので、様々な技術的助力を得ることができる）。情報技術を適用する方法として、たとえば（1）当時、調査対象者となった方々への追跡調査を実施し、調査の感想や現在からみた意義などをお話いただき、可能な範囲で動画データとして公開する、（2）当時のニュース映像・ドキュメンタリー・写真を著作権問題をクリアしうる範囲で公開する、それが不可能なら関連資料としてリスト化する、（3）調査の理解を助ける補助資料として当時の地図・写真をweb上でon demandで出せるようにしておく、（4）当時の社会状況を簡易な社会地図として表現する、というような方法論が考えられる。このように調査関連資料と成果を生きた状態で公開すれば、初学者や非専門家にも社会調査の意義が理解できるし、社会学の研究者・学生にとっては調査の様子を追体験することが容易になる。文脈を踏まえた調査の再分析もしやすくなるし、若い研究者に散見されるような、目先の新しさを追いかけて先達の研究成果を尊重しない態度も克服されるだろう。

長期的な構想としては、今回の研究期間で戦略的にかけた限定をはずし、名実ともに総合的な社会調査ミュージアムを目指す。第一に、今回の研究期間では「構造分析」と呼ばれる2-3の調査関連資料に限定をかけるが、長期的には社会学界で実施された代表的な大規模調査関連資料の収集・管理・公開を目指す。第二に、北日本のリージョン社会調査拠点として、地元北海道地区に関連した調査関連資料を網羅・ディレクトリ化し、また自前の社会調査展開能力も充実させて、北海道社会の分析を志す人々がひろく利用できるセンターとして認知されることを目指す。

## 2. 研究の目的

1990年から継続的に組織運営され、社会学分野を代表するデータアーカイブとして15年間の実績を積んできた札幌学院大学 SORD (Social and Opinion Research Database) を発展的解消し、「社会調査史の博物館」の構築を目指す。具体的には次の3つの作業を実施する。（1）さしあたり「構造分析」と呼ばれる、大規模研究者組織によって産出された調査成果の関連資料に焦点をあて、調査票・メモ・手紙・データ・ヒアリングテープ・書籍・映像資料などを体系的に収集整理し、社会調査に関心を持つ後続世代の研究者や学生が調査の過程と歴史的経路を理解できるよう整理・分析・公開作業を行う。（2）それら関連資料の再解釈に基づく研究成果を継続的

に産出し、これまでアーカイブズの側面への関心が薄かったきらいのある社会学会にアーカイブズ事業への理解と協力の意欲を喚起する。（3）北海道というエリアの社会学分野に限定したうえで、実施された社会調査の網羅的リストを作成し、『戦後日本の労働調査』（東京大学出版会、1970）のようなディレクトリ化を行う。これをもとに、北海道に痕跡を残した研究者たち（鈴木栄太郎、籠山京、庄司興吉、森岡清志、盛山和夫など数多い）の理論と調査の再構成によって社会学史の再構成作業を行う。（1）から（3）までの側面を総称して、本プロジェクトを仮に「社会調査史の博物館」と呼ぶことにする。それは、「解剖された抜け殻を陳列する、空気の止まった博物館」ではなく、社会調査と対象社会を生き生きとした姿で再活性化させ、後継世代へ伝承し、アーカイブ機能を果たす「双方向型ミュージアム」である。

すでに趣旨を理解下さった小林甫教授から、北海道大学退官にあたって、「構造分析」の金字塔である夕張産炭地域のライフヒストリー調査（布施鉄治編『地域産業変動と階級・階層：炭都・夕張/労働者の生産・労働-生活史・誌』御茶の水書房、1982年）関連資料の寄贈をいただいたので、以上のような観点から準備的整理作業を実施しているが、当時の社会構造と社会学の理論状況、社会調査過程とノウハウを再現し、今日的意義を明らかにできるという見通しを得ている。夕張調査資料群に加えて、2005年度で東京大学を退官する似田貝香門教授からも、いわゆる福武直スクールが実施してきた「構造分析」（具体的には研究計画欄に詳述）の諸資料を寄贈いただく内諾を得たので、その整理公開にも、準備してきた方法論を応用できる。

## 3. 研究の方法

研究目的欄に記述したように、本研究課題の柱は3つある。（1）「構造分析」と呼ばれる調査成果の関連資料について、体系的に収集整理公開作業を行う。（2）関連資料を再解釈・再構成した研究成果を産出する。（3）北海道エリア社会学分野で実施された社会調査の網羅的リストを作成、ディレクトリ化したうえで、調査史から社会学史を再構成する。この3項目に分節して研究計画・方法を記述する。

### （1）「構造分析」調査資料の収集・整理・公開

研究目的欄に記述したように、先述の夕張調査関連資料のほか、2005年度中にもう一つの

巨大な資料群を受け入れる。福武直の流れをくむ蓮見音彦・似田貝香門を中心として実施されてきた「構造分析」調査資料群である。具体的には2回に及ぶ広島県福山市調査（蓮見音彦編，1983，『地方自治体と市民生活』東京大学出版会； 似田貝香門・蓮見音彦，1993，『都市政策と市民生活—福山市を対象に』東京大学出版会.）、神戸市調査（蓮見音彦・似田貝香門・矢澤澄子編，1990，『都市政策と地域形成：神戸市を対象に』東京大学出版会）、そして東京調査（『現代都市の社会階層と集団・団体』科研費成果報告書，1995）の関連資料で、いずれも有力な研究者10-30人を全国的に組織して実施された調査である。資料の中身は、段ボール数十箱分のにぼる調査票・関連文献や統計・役所資料・新聞切り抜き・検討会レジュメ・メモ・整理票・地図・写真などの集積である。これらの調査資料を整理する順序として、①段ボールを開封して内容物を検討し、テーマごとに、時系列も考慮した大まかなグルーピングを行う ②紙束の一定単位のまとまり毎に番号を振ってリスト化する ③リスト間の関係性・一貫性・欠落を確認する ④グルーピングを再検討し、例えば結果として出版された書籍の各章ごとに区別するとか、中心的な研究者ごとに区別するとか、調査対象社会ごとに区別するとか、適切な方法を選択して書棚に並べる という基礎作業が必要であり、これに相当な労力と時間を要する。その後、あらためて資料群にラベルを付し、電子リスト化・データベース化して、適宜必要資料にアクセスすることが可能な状態になったら、分担者ごとに担当する資料群を決め読み込んでいく。

以上のような資料整理に目処がついた段階で、当時の研究組織に関わった主要な研究者にインタビューし、また手紙・メモ・通信記録など調査過程を再現できるような諸資料の寄贈をお願いし、調査過程の全体像を再現していく。さらに、対象社会のなかでキーパーソンと思われる人物については、調査現地に赴いて追跡調査を行い、調査当時との異同、調査の意義と限界・問題点などをインタビューする（これに関しては、過去、夕張調査に携わった酒井が助言・調整する）。インタビューは本人の承諾が得られる範囲で動画として撮影し保存、さらに写真・記念品などが存在すれば複写を打診する。キーパーソンが亡くなっている場合には、遺族に対して関連調査記録公開の可否を打診する必要も出てくる。このように調査現地に出張するさい、調査の主要なポイント・施設・人物について写真・動

画撮影を行い、公的機関等において関連資料の収集を行って、マルチメディア表現の素材収集につとめる。

平成18年度中は、こうした収集整理作業を行うことで手一杯であろう。ただ、他に寄贈希望が寄せられれば受け入れて、最低限の整理を行っておく。また今後、類似のセットを受け入れることを前提に作業マニュアルなどを作成し、紀要論文などの形で発表する。また、体系化された成果のマルチメディア型公開に向けて、新国・大国を中心に画像・地図を取り入れたwebサイト設計の検討と仕様書案の作成をおこなう。

予算面では、以上から調査旅費・通信費・研究補助人件費・謝礼・複写費等が必要となる。

(2) 関連資料を再解釈・再構築した研究成果の産出

(1)で記述した追跡調査の結果も踏まえながら、これら調査資料セットの再分析・再解釈へと踏み込んでいく。上記した整理作業を各分担者が適宜実施しながら作業メモを作成し、隔月ペースで整理検討会を開催する。この検討会において、①整理実務のノウハウ、②再解釈によって浮かび上がる仮説・可能性、③関連づけ可能な他資料の所在、④報告書と原資料の異同等諸事実・知見の解釈論、⑤研究者と対象社会のエピステーメーについての解釈等について情報・意見交換を行う。試行錯誤を伴うので再解釈の実を上げるためには一定の時間が必要だが、対象社会における意見・態度の分布を、現在の図表的・統計的表現によって先行する調査産出物と異なった形で表現することは比較的容易である。そこで、データの再表現についての見通しを得ることを優先し、適宜紀要などに発表していく。

歴史社会学・社会調査方法論を専門とする祐成と、歴史的資料の収集・分類・分析に長けている高橋を中心として、分担者が共同で資料の多次元解釈と再構築をおこなう。研究経費としては、追跡調査と打ち合わせのための旅費・通信費、研究補助のための人件費、文房具代などが必要とされる。

(3) 北海道社会調査の網羅的リスト作成と社会学史の再構成

分担者共同で、調査研究論文の資料閲覧・採集を広範囲に行い、北海道について行われた調査の一覧表を作成し「北海道社会調査データベース」とする。この中から重要と思われる調査を50件程度ピックアップし、調査目的、調査地域、調査の仮説、調査の結論、調査方法の特徴、調査の意義、などの項目について、論文類を参考に自由文章として記入・

コーディングして「調査概要ディレクトリ」を作成する。この作業は東大出版会から出版された2つのアーカイブの仕事—『戦後日本の労働調査』（1970）および『戦後日本の農村調査』（1977）—に倣った方法であるが、情報技術を利用して迅速化をはかりたい。すなわち電子的に入力するとリレーショナル・データベースに即座に反映・表現できるようなソフトウェアを、既成パッケージソフトを改良して開発したい。ソフトウェア仕様は新國が考案する。

ディレクトリが完成した段階で（平成18年度中には無理かもしれない）、それを踏まえて北海道を準拠点とする社会学史の再構成作業に踏み込む。すでに過去2年間、我々は隔月ペースで北海道における社会学的研究の見取り図を描く作業を実施してきた。具体的には、屯田村に関する調査研究（大國）、苫小牧および苫東開発に関する調査研究（西城戸）、室蘭の製造業に関する調査研究（中澤）、道東の大規模酪農地帯に関する調査研究（小内）といったテーマを設定し、研究の成果と今日的意義、他の調査や研究者との関係などを位置づけてきた。その成果は北海道社会学会2005年大会でも報告したが、以上のような作業を加速させ、行動科学／マルクス主義理論／貧困・社会福祉研究などの理論バックグラウンドの中に各調査や研究者を位置づけ、当時の社会状況と照合するとともに、調査によってこれらの理論がどのように修正されたか、あるいは調査によってどのように理論形成がなされたかを追跡していく。幸い北海道に関係したことのある社会学者は鈴木榮太郎をはじめとして相当多く、日本社会学史のかなりの部分をカバーできるような「社会調査による社会学形成史」を描くことができると考えている。

以上のことから研究経費としては、図書費、ソフトウェア外注費、打ち合わせ旅費、研究補助人件費、文房具費、コンピュータ周辺機器などが必要とされるので、これらを予算に計上した。

(4) 本課題によって受け入れる資料の中には、過去の調査対象者のプライバシーに深く踏み込んだ調査票、ヒアリングテープ、メモなどが含まれている。これらを生のまま公開せず、計数的な結果やグラフに加工して公表することは勿論である。また、これら生データの管理には十分な注意を払う。たとえば資料室に無断で立ち入る者がいないよう、無人時常時施錠を徹底するほか、特に注意を要するヒアリングテープなどは鍵のかかる戸棚に保存する。また調査票をスキャンして電子化する際には、

対象者氏名に付箋を貼るなどして、電子データが万一漏洩しても問題が生じない体制を作る。

#### 4. 研究成果

(1) リージョン拠点データアーカイブの構築  
共同研究は、札幌学院大学総合研究所のSORD（社会・意識調査データベース）データアーカイブを拠点に進められた。研究の課題は、特定空間の「読み取り装置」を解明するために、社会調査の成果とそのデータ（調査票だけではなく、調査関連資料を含む）をどのように活用するのかにある。「読み取り装置」という言葉には、データを読み取る装置という意味と実際の現実を読み取る＝調査票に書き込むという意味との二つがある。課題を遂行するために、共同研究に2つの柱を立てた。第1に、北海道における社会調査の水脈を発掘し、北海道における社会調査の鳥瞰図を得ること。第2に、SORDが受託している2つのデータセットを整理し、公開するための作業を行うことである。

##### (2) 北海道における社会調査の水脈

第1の柱は、北海道を対象とする主として社会学分野の社会調査を整理し、社会調査の水脈を発掘することである。そのためには分析の「単位変換」が必要だという指摘（佐藤健二）に基づき、研究論文単位でリストを作成するのではなく、調査単位でリストを作成し、調査のディレクトリ化を行うこととした。それによって北海道の社会調査の布置状況を明らかにする課題である。

戦後から1979年までの社会調査を5つのテーマ（開発と計画、産業・労働と階級・階層、布施グループの労働-生活過程、家族、貧困）のもとに整理し実態を把握した。第1に、北海道では質実剛健な実証的な社会調査が行われていたことである。長期にわたって同一ないし関連地域の調査を行い、聞き取り調査、調査票調査、行政資料などの多様なデータを駆使した実証研究が行われてきた。第2に、調査のうちのいくつかが行政からの依頼もしくは共同で実施されている点である。このことは、研究の志向性に実践的な側面が特徴的に見られることにつながる。第3に、北海道における調査研究の蓄積は、北海道社会の問題点を探るといふ問題関心を持つ一方で、知見の一般性を主張する傾向が見られる。

##### (3) 社会調査関連資料等の受け入れと『「夕張調査」資料集成』の作成

第2の柱で扱う対象は2つのデータセットである。布施鉄治らの北海道大学の「生活社会学研究会」が実施した「夕張調査」と関連

諸調査に関する諸資料（2004年度末に小林甫先生より受託）、および東京大学似田貝グループが実施した諸調査に関する諸資料（2005年度末に似田貝香門先生より受託）である。地域社会学でいう「構造分析」の二つの潮流の調査コレクションである。

段ボール箱 60 箱ほどの夕張調査資料コレクションは、『地域産業変動と階級・階層-炭都・夕張/労働者の生産・労働-生活史・誌-』（布施編、1982、以下『生活史・誌』と略）の材料となった資料群を含んでいる。資料の内容は、調査票・コーディングシート・メモ・手紙・ヒアリングテープ・書籍・報告レジュメ・関連雑誌類などである。

調査票と調査関連資料をどのように整理・保存するののかというノウハウは、日本の社会学分野の先行研究はあまり存在しない（「飯島伸子文庫」、佐藤健二による一連の研究は数少ない先行例である）。コレクションのうち夕張調査関連資料の整理に集中し、資料群を「調査団作成資料」と「調査団参照（収集）資料」の二つに区別した。「調査団作成資料」に関しては、「調査票のアーカイブ化」（調査票とコーディングシートの整理・保存を目的とする）と「調査データのデジタル・アーカイブ化」（調査データそのものの保存を目的とする）の二種類の作業を行った。「調査団参照資料」については、『生活史・誌』の「章」に基づき、当該「章」に関連すると考えられる資料をまとめて配架・収蔵した。

(4) リージョン拠点データアーカイブ構築の意味

結論として、次のことを言うことができる。北海道の社会調査空間は、ある意味で、「質実剛健な社会学」を作り出してきた。東京など本州の社会学研究とは別の独特の歩みであり、実践的な学問として社会調査が大学に位置付けられているという側面、社会調査が研究者を育てる側面を見てとれる。

他方、『「夕張調査」資料集成』は、第1に、夕張調査資料のコレクションを整理・保存し分析可能な状態にしておくことは、学説史的に見て重要な意味を持つ。第2に、調査資料群の保存・整理・再利用化作業の原型を作るという価値も担っている。第3に、それら資料は調査対象の社会にとっては保存する価値があり、場合によっては保存する義務すら生じる。この点で、学会全体としてアーカイブ体制を整えると共に、寄託する資料を調査者自身がどのように整理・保存するののかのガイドラインを作成し、標準化する必要がある。公的資金を得た調査に対し、標準的付属文書を定め、代表者にインストラクションを

施すなど、調査関連資料にまで責任を持つ工夫が必要となる。さらに、意義の大きい調査資料を再利用可能なものにするこゝで、社会（調査）史の再定置、地域社会の記憶の保存、社会学におけるアーカイブズ学（とくに電子化による資料保存技法）の発展に寄与することができる。

このように、社会調査関連資料をめぐる検討を行う中で、SORDは、国内・外の他の主体との交流拠点となる。一つは、ウェールズのスウォンジー大学にあるSWCC (South Wales Coalfield Collection) であり、もう一つは、早稲田大学ライフコースアーカイブ研究所である。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計7件）

- ① 中澤秀雄、西城戸誠、大國充彦、新國三千代、祐成保志、新藤慶、小内純子、高橋徹、「社会調査のデータアーカイブズ学」の必要性-札幌学院大学 SORD が取り組んだ「夕張調査資料集成」作成経験からの提言-、理論と方法、日本数理社会学会学会誌、査読有、24(1)、2009、121-128
- ② 齋藤康則、社会学的質的データのデジタル・アーカイブ方法論・序説-北海道大学・布施鉄治グループによる炭都・夕張調査に即して-、社会情報、札幌学院大学社会情報学部紀要、査読無、17(1)、2007、17-33
- ③ 庄司知恵子、布施グループ・夕張調査データのテキスト化における「入力ルール」生成過程の記録-社会学的質的データの定型性と再現性をめぐって-、社会情報、札幌学院大学社会情報学部紀要、査読無、17(1)、2007、35-46

〔学会発表〕（計1件）

- ① 齋藤康則、社会学における質的データの電子化の試み-炭鉱都市・夕張をフィールドとした『北大・生活社会学研究会』の調査データに即して-、日本アーカイブズ学会2008年度大会、2008/4/20、学習院大学

〔その他〕

報告書

- ① 札幌学院大学社会情報学部 SORD プロジェクト、北海道における社会調査の水脈-戦後復興期から1970年代まで-、2010年3月
- ② 札幌学院大学社会情報学部 SORD デー

データベース編、「夕張調査」資料集成－  
布施鉄治編『地域産業変動と階級・階層』  
(1982)調査関連資料コレクション、2009  
年12月

ホームページ等

札幌学院大学社会情報学部 SORD データアー  
カイブ <http://su10.sgu.ac.jp/sord/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大國 充彦 (OHKUNI ATSUHIKO)  
札幌学院大学・社会情報学部・教授  
研究者番号：40265046

### (2) 研究分担者

中澤 秀雄 (NAKAZAWA HIDEO)  
中央大学・法学部・教授  
研究者番号：20326523  
西城戸 誠 (NISHIKIDO MAKOTO)  
法政大学・人間環境学部・准教授  
研究者番号：00333584  
祐成 保志 (SUKENARI YASUSHI)  
信州大学・人文学部・准教授  
研究者番号：50382461  
新藤 慶 (SHINDO KEI)  
新見公立短期大学・幼児教育学科・講師  
研究者番号：80455047  
齋藤 康則 (SAITO YASUNORI)  
山口芸術短期大学・保育学科・講師  
研究者番号：00516081  
庄司 知恵子 (SHOJI CHIEKO)  
岩手県立大学・社会福祉学部・専任講師  
研究者番号：30549986

### (3) 連携研究者

新國 三千代 (NIKKUNI MICHIO)  
札幌学院大学・人文学部・教授  
研究者番号：00133778  
小内 純子 (ONAI JUNKO)  
札幌学院大学・社会情報学部・教授  
研究者番号：80202000  
高橋 徹 (TAKAHASHI TORU)  
札幌学院大学・社会情報学部・准教授  
研究者番号：80316231  
小池 英勝 (KOIKE HIDEKATSU)  
札幌学院大学・社会情報学部・准教授  
研究者番号：60405636  
酒井 恵真 (SAKAI ESHIN)  
札幌学院大学・人文学部・教授  
研究者番号：80073493  
内田 司 (UCHIDA TSUKASA)  
札幌学院大学・人文学部・教授  
研究者番号：40142905